

巻頭言

東海大学健康科学部
社会福祉学科

小林 隆 児

医療・教育・福祉の狭間で

医療・教育・福祉の連携の重要性はいまや我々にとっては常識となつていきます。しかし、実際は幾多の困難が横たわっているのが現状です。それはなぜか、私自身のさやかな経験のなから思いついたことを述べてみたいと思います。

昨年四月、私は某大学の教員養成系学部から現職に移りました。教育現場の方々とお話してよく指摘されたのは、医学用語の難解さです。そのため講義をする際には極力専門用語を使用しないこと、いわゆる外国語は絶対に使用しないことを肝に銘じてきました。しかし、いつの間にか専門用語を使って話していることを後になってよく指摘されます。いつも反省することはかりでした。日頃医者同士で患者さんのことを話す時には専門用語を用いる方がはるかに理解しやすいので、つい専門用語を使いたくなります。自分達とは異なった専門領域の人々といざ話すとなると、このような習慣は容易にはとれませんかから随分と気遣

いをしなくてはなりません。そのためかなり意識的に言葉を選んで話します。さもないと必要な誤解さえ生んでしまいます。

福祉の世界に入ってからはまだ日が浅いのですが、ある会議で早速あることを指摘されました。患者ということばをなげなく使っていたら、福祉の世界ではクライエントという用語を使用するといわれました。またひとつ反省いたしました。教育の世界から少し離れて気が緩んだのかもしれませんが、しかし、よくよく考えてみると、このような専門領域の異なる人々同士のコミュニケーション上の問題は、けっして単に用語上の問題として矮小化してはいけないことに気づきます。コミュニケーションの基本に相手に自分の気持を伝えたいという欲求を持っていることがもとより大切なのでしょうが、ともに一つの体験を共有していくなかでコミュニケーションを図っていくということがより重要なのではないのでしょうか。我々の関与

する臨床の場では医療・教育・福祉各々独自で解決できるような問題はほとんど皆無といっているでしょう。しかし、各専門領域の人々が関連職種の人々に対して現実にどれほどまでに連携の必要性を感じているか、そしてそれに向けて実際の程度努力しているかを自ら振り返ってみても、単純に首肯できないものがあります。自分の専門領域にどっぷり浸かっていると感じることのない様な思いを、その狭間の領域で働いているといやでも感じさせられます。

我々が目指さなくてはならないことは、ただ自らの専門領域のみでは問題が片づかないからという消極的な理由からではなく、従来の枠のなかで作られた実践理論を、関連領域との連携を深めるなかで、新たなものへと創りなおしていくことではないでしょうか。そのような成果が生まれて初めて連携の重要性が認識され、そのような実践が大きな波及力を持つようになるのではないかと感じています。

(こばやし りゅうじ)

発達教育

1995
2月号

表紙のアーティストたちも被災に

1月17日早朝に発生した阪神大震災は兵庫県西宮市にも甚大な被害を及ぼしました。西宮市には今年度の表紙を飾ってくれているすずかけ作業所のメンバーとかれらへの絵画指導とレイアウトでおなじみの、はたよしこ先生がお住まいになっていらっしゃいました。

さいわい、メンバー、はた先生、ともにご無事とのこと。しかし、余儀なくされている避難生活、報道のように大変な環境の中、精神面にも痛手を負って、ご不便な生活を強いられていることは察せられます。

この災害により、「発達教育」の2月号の表紙の依頼をひかえさせていただきました。急遽、このように変更させていただきましたことをご了承いただくとともに、お詫び申し上げます。

がんばれ!すずかけ作業所のメンバーたち

そして、被災者のかたたち

ハンディキャップを持つ子どもたち、青年たち、また彼らの親ごさんから被災者の方たちへのメッセージが、多数寄せられています。(裏表紙に掲載)

すこしでもお力になれること

たくさんの人達がこの災害の援助に様々な形で活動しています。私たちも、多くの仲間たちのためにできることをと考え、裏表紙に義援金募集の広告を載せました。どうぞ、みなさまからの暖かいご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

阪神大震災の被災者のみなさまに
こころからお見舞い申しあげます